

2015 年元旦新聞

元旦には新聞各紙をじっくり読むことにしている。いつもより、ずしりと重い。広告や正月「特集」が大半だが、読みごたえのある記事も多い。翌日が休刊なので、2日にわたり読む。

写真は新聞各紙の1面である。各紙が何をとりあげているか興味深い。昨日のレポートでも書いたが、今年には戦後70年なので、関連記事がもっと多いかと思っただ、意外に少なかった。朝日が「鏡の中の日本 戦後70年」という特集を掲載していた。



1面記事でとりわけ面白かったのは、毎日の「4000人の村 住民が道路整備」である。リードに「地方は疲弊する一方だが、都会にない豊かな暮らしが再認識され、地道な活性化の取り組みも芽生えている。信州の小さな村の取り組みから『地方元年』の話を始めたい」とある。長野県下條村だ。「地方消滅」などと叫ぶ向きもあるが、どっこい元気で活力ある村も多い。

元旦の新聞は社説の方が各紙の主張、特徴があらわれている。社説見出しを記してみよう。朝日「グローバル時代の歴史『自虐』や『自尊』を超えて」、読売「日本の活路を切り開く年に 成長力強化で人口減に挑もう」、毎日「戦後70年日本と東アジア 脱・序列思考のすすめ」、日経「戦後70年の統治のかたちづくりを」、中日「戦後70年のルネサンス」

やはり1面とは違って、戦後70年に関係するものが多い。見出しからも各紙の主張の違いが分かるが、とくに読売と毎日・朝日が同じようなテーマを扱っていても、言いたいことの違いは明らかである。読売は「台頭する中国に備えよ」「欠かせぬ日米同盟強化」と、これまでの主張をはっきり打ち出す。毎日は「序列思考の呪縛から解放され、互いのナショナリズムを尊重しあう東アジアを展望していく。その新たな地平を切り開くことが、本当の意味での戦後レジームからの脱却だと考える」と述べる。

中日社説の最後も紹介しておきたい。「戦争での新聞の痛恨事は戦争を止めるどころか翼賛報道で戦争を煽り立てたことです。その反省に立つての新聞の戦後70年でした。---政治も経済も社会も人間のためのもの。私たちの新聞もまた国民の側に立ち、権力を監視する義務と「言わねばならぬこと」を主張する責務をもちます。その日々の営みが歴史の評価にも堪えるものでありたいと願っています。」

(2015年1月2日)